

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム (2005.12) 6巻1号:94～96.

医学教育のグローバル化

松岡悦子

【談話室】

医学教育のグローバル化

松岡悦子*

「<不合格>理由は年齢? 55歳主婦、群馬大を提訴」という記事を覚えておられる方は多いだろう。東京都の主婦が医学科を受験したのに不合格になったため、個人情報の開示を請求したところ、彼女の得点は合格者の平均点を上回っていたことが判明。「年齢を理由とした不合格判定はおかしい」と提訴したのだ。

その後、朝日新聞に次のような医師からの投書が載った。要約すると、「医学生1人当たりの養成に必要な経費は、6年間で6千万円と言われる。これだけの国民のお金が使われることを考えると、それに見合う社会的還元をできる人しか医学部進学は許されないのではないか。55歳という年齢で若者を押しつけて入学したとしても、その後に独り立ちして働ける年数を考えると、社会に還元できる期間はごく短い。だから、この主婦の不合格はやむを得ないだろう」というものだ。

たしかに、限られた資源をどう配分するかという生命倫理で言うところの、「正義」や「公正」という視点からこのケースを考えると、投書の考えには一理ある。でも、こんなふうにも考えることもできる。医師養成にはたしかにお金がかかる。そこでこの投書のように、医師養成をコストの面から考えるという発想をもっと徹底させると、何も日本で医師養成をしなくてもよいことになる。もっとコストの安い国で医師を養成してもらい、後で呼び戻すことも可能だし、医師の余っている国から医師を受け入れて日本で働いてもらうこともできる。コストという視点で考えると、人やモノや情報が国境を越えて、資本の論理で動いていく状況はすでにあちこちで起こっている。医師養成の国際分業、医学教育のグローバル化だ。医師についてはまだそれほどでもないけれど、看護師の世界では、フィ

リピンで養成された看護師が世界のあちこちで働いている。医師養成の国際分業や多国籍化について日本はまだ鎖国状態だけれども、いずれ日本もそれに加わる 때가来るのだろうか。この投書を読んで、私の出会った人たちのことを思い出した。

ハンガリーの医科大学で

- 買い物に出ようと部屋に鍵をかけたところで、おばさんに呼び止められた。「あなた日本人、それとも中国人?」こう聞くおばさんはフィリピン人で、イランに住んでいて、娘がこの大学の医学部の英語コースに入ることになり、昨夜ハンガリーに着いたと言う。娘の部屋が3人部屋なので、私の部屋を見せてと言う。「やはり1人部屋でないかね。若い娘は自分の入りたいときにお風呂に入ったり、台所使ったりしたいでしょ。」イランでは、医学部に入るのはとてもむずかしいので、娘はハンガリーに2年間いて72単位を取ったらイランに戻って編入学するらしい。1ヶ月遅れの入学だけれど、この医科大学は「ノープロブレムだ」と言ってくれたそうだ。
- 大学から寮に帰る途中で、イランから来た医学部の2年生の女の子と話した。「イランにも医学部はあるけれど、入るのはとても難しいので、毎年何十人もハンガリーに来るのよ。イランよりこちらのほうが自由でいいわ。イランのように体を覆う服を着なくていいし。でもハンガリーは、生活費がイランの2倍かかるのよ。それでも医者になりたいから来たの」
- ノルウェーから来た医学部英語コースの1年生によると、ノルウェーにも医学部が4つあるけれど、

*旭川医科大学 社会学

入るのはとても難しい。だから多くの学生がハンガリーにやって来るのだそうだ。彼女いわく「もちろんノルウェーの大学に入れるなら入りたい。ノルウェーの自然がなつかしいわ。でも生活費はハンガリーのほうがずっと安いから、ここで生活をするのも悪くはないのよ」

- 他にも多いのがイスラエル人だ。イスラエルでは、毎年全国で約300人しか医学部に入れにくい。だから、ハンガリーの地方都市にあるこの医学部には今年70人がやってきた。首都ブダペストの医学部にはもっとたくさん来ている。彼らがハンガリーに来るのは、ハンガリーの医科大学のレベルが、イスラエルの医師国家試験に受かるぐらいのレベルだからだそうで、これがロシアの医学部になると受からないのだそうだ。

これは、2003年に私が2週間ハンガリーの医科大学に滞在したときの話だ。そこでは毎年、母国語のハンガリー語コースの学生他に、英語コースの学生を受け入れているそうだ。英語コースの学生たちは必ずしも18才ではなく、兵役を終えてから来る学生や、一度仕事についてから来る学生もいるので、入試に受からない生徒もいる。そういう場合には1年間の pre-med コースが用意されている。つまり、すぐに医学部に入学できない生徒には pre-med コースがあるので、ほぼ全入の状態と言える。学費は年間8千USドル。大学にとっては外貨を得る良い方法で、このお金で英語の教科書を買うなどの、設備の充実に努めることができる。とは言え、教員はけっこう大変だ。まったく同じ内容の授業を、ハンガリー語と英語の2つの言語でしなければならない。私は英語コースの授業に参加させてもらったけれども、なかなか癖のある学生たちに、母国語でない英語で立ち向かうしんどさに加えて、異文化摩擦が加わる。兵役を終えてきた学生たちは、何かにつけて手強そうだし。もともと、ハンガリーのペイジという町にある医科大学で始まった英語コースが、これはなかなかいけるとうので、今では国内4つの医科大学すべてに広まったそうだ。今では、隣国ドイツの学生を相手にしたドイツ語コースを持つところもあると言う。

送り出す側の事情

では、学生をハンガリーに送り出す側の事情はどう

なのか。ノルウェーを例にとると、ノルウェーには4都市に医学部があり、4カ所合わせた医学部定員は500名弱だ。また2000年秋に、ハンガリーの医科大学に留学したノルウェー人医学生は300人にも上るそうだ。ノルウェーでは、ほとんどの留学生たちの学費、滞在費を奨学金でまかなっているというから、政府としては国内に医学部を新設するより、外国で養成してもらう方を選んでいることになる。その一方で、ノルウェーに留学してくる外国からの医学生もいる。とくにドイツでは医学部に入るのも、医師としての就職先を見つけるのも難しいので、ドイツの学生がノルウェーの医学部に入ることもあるようだ。*

ギリシャで出会った医学生からも似たような話を聞いた。ギリシャでは医学部に不合格になった学生が東欧の医学部で単位を取った後ギリシャに戻ってきて編入学するので、卒業するときには入学時よりずっと人数が増えていて、何人卒業したのか分からないと言っていた。日本だと国内だけの偏差値で生徒が輪切りにされるけれど、ヨーロッパでは国境を越えてヨーロッパ内で学生の序列化が進んでいると言える。

アジアの事情

2005年秋に中国の南部、広州の近くにある広西医科大学に行った時にも、やはり留学生の話聞いた。毎年80-100人の留学生をベトナム、インドネシア、ネパールなどから受け入れていると言うから、学生の1割弱が留学生だ。中国の大学のキャンパスは、中に商店街や教職員の住宅街などがあってまるで一つの町のようなのだが、外から見える留学生用の寮も洗濯物が満載で活気に満ちている。その時もさらにもう一棟建築中だった。留学生は最初の1年間で中国語を学び、中国語で医学部の授業を受ける。そして卒業後、母国で医師国家試験を受ける。もちろん中国の医師国家試験を受けることもできるが、中国人でも合格率30%なので、留学生にはなかなか難関だ。留学生の授業料は中国学生の4倍の額だと言うから、やはり大学にとっては収益になる。「でも、目的はお金じゃないのよ。」と国際教育センターの先生は言う。「文化交流が目的なの。医者にとって、いろんな文化的背景の患者を診ることはよいことだし、アジアの人脈を作る上でも、多文化に触れておくことは重要なことでしょう。」うーん、なかなかの長期的視野だ。

こうして、すでに学生がヨーロッパやアジアという単位で移動しているのを見聞きするにつれて、日本の医師養成はこのままなのか、それともいずれ移動が始まるのか興味深い。その時日本の学生がどう動くのか、アジアの学生が日本の医学部を選んでやって来るのか、それとも医師養成はもっと人件費の安い国でやる

うということになるのか。止まらないグローバル化の前で、わたしは立ち止まってしまう。

* ノルウェーに関する情報は、ノルウェー夢ネット・代表の青木順子さんよりいただきました。